



Title	経験の根源：トマス・アクィナスの形而上学 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	古舘, 恵介
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12380号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/63424">http://hdl.handle.net/2115/63424</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Keisuke_Furudate_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 古 舘 恵 介

## 学位論文題名

経験の根源——トマス・アクィナスの形而上学

一般に「存在」と訳される *ēivai* / *esse* (= to be)、および「存在するもの」と訳される *ōv* / *ens* (= being) は、西洋哲学の長い歴史を通して常に問題となってきた概念である。とりわけ中世スコラ哲学の大成者とみなされるトマス・アクィナスの哲学においては、「神は *esse* そのもの」というよく知られたテーゼに見られるように、*esse* および *ens* がその形而上学の根本概念となっている。トマス・アクィナス研究の中では、これらの概念は一般にはやはり「存在」ないし「存在するもの」の意味に解されてきたが、そうした理解では捉えきれない側面があることも夙に指摘されてきた。このトマス・アクィナス研究上の一大問題に独自の切り口から挑み、「存在」および「存在するもの」には収まらないトマス・アクィナスの *esse* および *ens* の概念の解明を改めて試みたのが、本論文である。中心的な研究対象となるのは、第2章で取り上げられる『命題論註解』や第5章で取り上げられる『形而上学註解』など、アリストテレスの著作に対する諸註解書である（第3章で取り上げられた『ボエティウス三位一体論註解』も、その名の通りボエティウスの著作に対する註釈書ではあるが、特に本論文が検討対象としているのはアリストテレスを下敷きにした議論が展開されている箇所である）。

第1章は、トマス・アクィナスの *esse* 概念をめぐる20世紀の研究史を、19世紀末から1930年までの第一期、1930年から1980年までの第二期、1980年以後の第三期に区分した上で概観している。第一期では、トマス・アクィナスの *esse* 概念は概して「存在」の意味に解されてきたのに対して、現代のトマス・アクィナス研究の成立期と言える第二期になると、*esse* 概念をなお「存在」の意味に解しつつもその「働き・現実態」(actus)としての側面を重視したジルソンの他、*esse* 概念を「完全性」と解釈するファブロ、「原肯定」(Ur-Ja)と解釈するロッツなどが現れ、第三期以降の現在の研究に受け継がれているとする。次章以降で本論文が提示することになる解釈は、トマス・アクィナスの *esse* 概念を「存在」にはとどまらない次元において捉えようとしたファブロやロッツの解釈の方向を、さらに押し進めたものとして位置づけられる。

第2章は、定動詞 *est* についてのトマス・アクィナスの見解を、『命題論註解』1巻5講のテキストに基づいて明らかにする。トマス・アクィナスによると、人間の知性が *esse* を把握する働きは、主語と述語を結合して判断ないし命題を形成する働きとされる。それゆえ、まさに命題を形成する際に用いられる定動詞 *est* についてのトマスの見解は、トマスの *esse* 論の核心を示す議論として、ジルソン以来多くの研究者によって検討されてきた。ジルソンは、命題の中で用いられる *est* は、第一義としては「存在」を表示すると解釈していたが、長倉久子は、日本語の助動詞「だ」に相当するという異色の解釈を提示している。本論文は、この長倉の解釈に含まれる洞察を受け継いだ上で、*est* が表示するとされる「現実性」(actus, actualitas)については新たな解釈を導入し、定動詞 *est* をひとまず概念なき純粋な述語づけと解釈している。

第3章以降は、定動詞 *est* に代わり、現在分詞 *ens* が考察対象となる。まず第3章は、『ボエティウス三位一体論註解』5問1項を中心テキストとしながら、形而上学の主題とされる「*ens* である限りの *ens*」(ens in quantum ens) という概念を考察する。トマス・アクィナスによると、この「*ens* である限りの *ens*」は「*esse* 的にも定義的にも質料に依存しない」とされるが、ここで考えられている非質料性の内実が問題になる。「*ens* である限りの *ens*」の非質料性とは、知性による「分離」（ないし「抽象」）の作用によって捉えられるものであると考えられ、神や天使のようないわゆる「分離実体」の非質料性とは異なるものであることが示唆される。

第4章は、『真理論』1問1項における *ens* の規定を検討する。その議論によると、*ens* とはあら

ゆる概念構成の出発点をなす「第一に知られるもの」である一方で、各々の概念はその ens への「付加」によって、とはいえ「ens ならぬもの」の「付加」によってではなく、ens そのものが限定されることによって、構成されるという。ここで論じられている「普遍的な ens」(ens universale) は、前章および次章で取り上げられる「ens である限りの ens」ないし「ens 一般」(ens commune) と重なるものと考えられる。しかし『真理論』においては、こうした ens の「知られるもの」という性格と、第 3 章で論じられた非質料性との関係については何も示されていない。そこで求められるのがこの両者を同一の文脈で論じるテキストであり、その検討が次章でなされることになる。

最も大部となる第 5 章では、いよいよ『形而上学註解』が検討される。この著作は、形而上学の主題を「ens である限りの ens」とする学問論から、ens そのものの概念の解明までを体系的に展開した恐らくは唯一の著作であるが、従来の研究では十分に検討されることが少なかった。本論文が注目するのは、アリストテレス『形而上学』9 卷 10 章における「ens そのもの (τὸ ὄν αὐτό, ipsum ens) は生成も消滅もしない。いったい何から生成するというのか」(1051b29-30) というテキストに対する、トマス・アクィナスの註解である。この箇所では、ens が質料に依存しない非質料的なものであるということがいかなることであるかが論じられている。本論文の解釈によると、ここで語られているのはいわゆる「分離実体」のみに該当する非質料性ではなく、「ens である限りの ens」のもつある種の非質料性であるとされる。本論文はこの解釈に基づいて、そこで論じられる「ens である限りの ens」の性格を、限定された個々の事物の根底にある限定以前のものであり、したがってそれは定義において単純であり、質料とも結合しておらず、また知性がそれを把握するときには命題を形成しないという、三つの意味で単純なものであるという性格をもつものとする解釈を提案している。そしてこのように極度に単純なものである ens が持っている数少ない具体的な性格として、それが「知られることができる」ということがあり、人間の経験はすべてこの「知られるもの」が限定されたものとして解釈することができるのである。

終章では、第 2 章で示された定動詞 est の「概念無き述語づけ」という性格と、第 3 章～第 5 章で示された現在分詞 ens の「知られるもの」という性格とを総括し、両者の根底にある esse 概念についての解釈の方向が示唆されている。それによると、esse とはひとまず、知性によって把握されるために、そして何らかの意味での「真」を成立させるために、事物がもつ根拠であると結論することができる。トマス・アクィナスにとって esse をめぐる形而上学とは、したがって、人間の経験の根源を明らかにする学問だったと言える。